

令和 6 年 5 月 29 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00538

研究課題名(和文) 使役状況における単文から複文への韓国語の連続性の解明 日韓対照研究の観点から

研究課題名(英文) Study on the continuity of Korean from simple sentences into complex sentences in a causative situation - from the viewpoint of a Korean and Japanese contrastive analysis -

研究代表者

崔 貞沔 (Choi, Jungah)

金沢大学・人間社会研究域・客員研究員

研究者番号：70821908

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：使役構文の連続性を論じる上、統語論的分析よりは認知言語学的観点からの分析がより有効であると考えようになる。Shibatani(2006)における行為の起源が崔(2018)で述べた「認識的先行」であると着目する。つまり、使役状況を話者の認識の観点、定義を行い、話者が行う使役状況のプロセスは認知言語学で言うメトニミーであると主張するに至る。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来のテ形および-ese節の複文構文の研究は、文法形式および意味用法を中心とした研究が蓄積されてきたが、認知主体の認知プロセスにおける研究はほとんど分析されていない。これまでの「-ese節(もしくは、テ形節)の認識的先行」においての「似通い」文などの概念をより明示的に論じることができた上、認知主体の認知プロセス、つまりこれまでメトニミーの観点から使役状況の連続性を論じたものは知見の限りでは見られない。

研究成果の概要(英文)：In discussing the continuity of causative constructions, it became apparent that the analysis from a cognitive linguistic perspective is more effective than syntactic analysis. This approach emphasizes that the origin of action in Shibatani (2006) is what Choi (2018) refers to as "epistemic precedence." In other words, it defines causative situations from the speaker's recognition perspective and argues that the process of causative situations performed by the speaker is metonymy, as defined in cognitive linguistics.

研究分野：使役状況の連続性

キーワード：複文構文 使役状況の連続性 話者の認識 認識的先行 メトニミー

1. 研究開始当初の背景

典型的な「他動的状況」においてその中心的意味とは、「意志性をもつ動作主が無生物の被動作主に影響を与えるもの」である(Lakoff 1977, Hopper & Thompson 1980)。本研究では、このような他動的状況(以下、他動性)のプロトタイプを本稿の思いつき使役状況の起点として考えている。そして、被動作主の対象を有情物に替えられる「使役的事態」を作ると、使役性プロトタイプへその拡張が十分に期待できる。

次に、日韓語の使役接辞による使役動詞の構文が、意味的かつ統語的に中間的な状況に位置づけられるという先行研究に基づけば(Shibatani, M. & Chung, SY. 2001, 崔 2019)、使役接辞による使役動詞のカテゴリー化もまた可能であるという考えである。他方、テ形節(または、韓国語の-*eoseo* 形節)による意味的かつ統語的分類において、申請者は、「付帯」および「認識的継起」(「継起」用法の下位分類の1つ)は従位接続であるという結果に基づき(三原 2013, 崔 2018)、従位接続の構文構造には主節による認識的先行が働いているという主張を行った。特に、韓国語の-*eoseo* の形式は、この認識的先行の有標であり、「広義の使役的事態」をも示唆している。認識的先行を広義の使役性として捉え、認識的先行に関するテ形節および *eoseo* 形節のプロトタイプを提案する。そして、今後それぞれの構文パターンによるカテゴリー化が進め、単文から複文に到る使役状況構文の全体像を考える。使役構文においてのこれらの発想は、結合価を増加させる、埋め込み文として考えるという従来の典型的な使役構造とは異なる。

2. 研究の目的

本研究では、他動詞による単文構造を起点とし、使役接辞(日本語では *sase*, 韓国語では *i/hi/li/ki*)による使役動詞の構文を中間構造と位置づけ、日本語ではテ形節、韓国語では-*eoseo* 形節における複文構造へと到る、使役性の連続性を明らかにすることを目的としている。以下のように、使役状況に基づく3段階の考察を通じて、研究を進めていく。

①韓国語において「動詞のカテゴリー」とそのスキーマの導入し、使役状況における単文構造の再考察を行う。

②中間構造において、起点となる単文構造の記述枠組みを用いて、ケース・スタディーとして使役性の内部構造を分析し、単文構造と中間構造のカテゴリー別の対応関係を示す。

③複文において、テ形節および *eoseo* 形節の使役状況における中心的なプロトタイプとして提案し、中間構造と同様、構文パターンによるケース・スタディーとして従属節の内部構造を明らかにする。

3. 研究の方法

初めに、連続性の起点となる単文構造の分析には、原始要素の動詞を認め、その「動詞のカテゴリー」を発展させた、韓国語における「述語タイプ」とそのスキーマの導入が有効である(鄭 2010, 崔 2020)。次のステップに、本研究では、使役接辞による使役動詞の構文を中間構造として位置づけている。その根拠として、本研究の立場は、使役構文は必ずしも埋め込み構造を仮定しなくとも良いという先行研究側に立っていることにある。すなわち、日韓語の使役構文は、どちらも文レベルではなく、被使役の事象が使役の事象に埋め込まれているという意味レベルでの埋め込みであることを主張し、使役構文を提案する。この中間構造に関しては、これから韓国語を先に、起点となる単文構造の記述枠組みを用いて、ケース・スタディーとして使役性の内部構造を分析し、単文構造と中間構造のカテゴリー別の対応関係を示すことになる。

4. 研究成果

使役構文の連続性を論じる上、統語論的分析よりは認知言語学的観点からの分析がより有効であると考えようになる。Shibatani(2006)における行為の起源が崔(2018)で述べた「認識的先行」であると着目する。つまり、使役状況を話者の認識の観点、定義を行い、話者が行う使役状況のプロセスは認知言語学で言うメトニミーであると主張するに至る。

従来の-*ese* 節構文の研究は、文法形式および意味用法を中心とした研究が蓄積されてきたが、認知主体の認知プロセスはほとんど分析されていない。これまで「-*ese* 節(もしくは、テ形節)の認識的先行」と「似通い」などの概念をより明示的に論じるものは知見の限りでは見られなかった結果である。

(1)『言語文化論叢』(2020.3)に「動詞接辞-*i/hi/li/ki* の派生方向と動詞の意味クラスの関係

付け—韓国語の語彙的使役および受身教育の観点から—」を掲載。(2)日本語文法学会第 22 回大会(2021.12.11)で「使役性を用いたテ形節の構文分析」発表。(3)第 74 回朝鮮学会大会(2023.10.8)で「同一の使役状況における単文から-ese 形節複文までの使役構文の分析—認知主体の認知プロセスの観点から—」発表。現在それぞれの学会誌に投稿を準備中である。さらに韓国の、(4)「2024 年度国語学会学術大会(東京大学,2024.8.12)」で採択され、日韓対照研究の観点からその成果発表を行う予定。

【これまでの引用文献】 崔(2020)「動詞接辞-i/-hi/-li/-ki の派生方向と動詞の意味クラスの関連付け—韓国語の語彙的使役および受身教育の観点から—」/崔(2019)「韓国語の使役接辞を用いた使役構文について—日韓対照研究の観点から—」/崔(2018)「韓国語の「-어서」・「-고」形節の意味類型と統語構造：日本語のテ形節との対応関係に基づいて」/鄭聖汝(2010)「韓国語における他動性」/三原(2013)「テ形節の統語構造」/Shibatani, M.(2006) "On the conceptual framework for voice phenomena"/Shibatani, M.& Chung, SY.(2001) "Japanese and Korean Causative Revisited"/ Hopper & Thompson (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse"/ Lakoff (1977)"Linguistic Gestalts"/

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 崔 チョンア	4. 巻 24
2. 論文標題 動詞接辞-i/-hi/-li/-ki の派生方向と動詞の意味クラスの関連付け 韓国語の語彙的使役および受身教育の観点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語文化論叢	6. 最初と最後の頁 31-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/00057382	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 崔 チョンア	4. 巻 25
2. 論文標題 韓国語の/masid a/(美味しい)に見られる語彙化 非規範的特徴をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化論叢	6. 最初と最後の頁 75-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/00061564	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 崔 チョンア
2. 発表標題 使役性を用いた-ese形節の構文分析 日韓対照研究の観点から
3. 学会等名 朝鮮学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 崔 チョンア
2. 発表標題 使役性を用いたテ形節の構文分析
3. 学会等名 日本語文法学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 崔 チョンア
2. 発表標題 韓国語の-a/e形接続と-se形接続の競合と共存について - 日本語の中立形接続・テ形接続との対照研究の観点から -
3. 学会等名 朝鮮語教育学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>日本語文法学会第22回大会 https://www.nihongo-bunpo.org/history/22nd/ 第72回 朝鮮学会大会プログラム https://chosengakkai.sakura.ne.jp/index.files/2021_program.pdf</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	許 インヨン (Heo Inyeong)		韓国語の通時的資料における助言
研究協力者	大江 元貴 (Ooe Motoki)		日本語における助言

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------